

「色」の対比で楽しむ

今瀬 一博

色を詠み込んだ春の作品の紹介から始めて、主な色の定義とその詠まれ方を一通り見てきました。今回からは季節の移ろいに従って、様々な色を詠み込んだ「夏の句」を鑑賞しつつ、その効果や味わいについて考えてみたいと思います。

夏は一年で最も暑い季節であり、私達の生活を取り巻く自然にも勢いや強い生命力を感じます。「色」という視点から見ると、野山も田畑も大部分が緑色に覆われるので、夏の季語には「青葉」「青田」「青嵐」「青梅」「新緑」「万緑」「緑蔭」など、「青」や「緑」が直接付くものが多くあります。又「夏」は「朱夏」とも言い、五行では「赤」を夏に配しています。照りつける日差しが最も強い季節なので、季語にも「赤」の付くものがあったり、暑を連想させるために「赤」という文字を詠み込んだ句もあります。一方、暑さゆえに人々が涼を求めることもあり、「白服」「白靴」「白地」「白日傘」など、見た目にも涼しい「白」の付く季語も多くあります。ただし作品に用いる色の種類という点では、前述のような特定の色に偏る傾向もあり、色のバリエーションは「春」や「秋」ほど豊富ではないと言えます。

そこでここ何回かは、単に「青」「緑」「白」や「赤」が付いている句を取り上げるのではなく、二つの色を対比させて句に深

みを与えている作品や、詠み込まれている「色」によって一句の成否が決まるような「夏」の作品を取り上げて鑑賞してみます。先ず今回は、特に「白」を他(の色)との対比によって捉えている作品も多かった事から、この対比の妙について書いてみます。何ものにも染まらない白は、他の色との明確な対比によって、読者に強く印象づけられ、一句の感動の中心をより鮮明にします。

新調の白服まぎれてはならず

福井 隆子

この作品は「白」と他の色を対比させる詠み方はしていませんが、何にも染まらない「白」という色の特徴を端的に伝えます。「まぎれてはならず」は、白系の服が多くなってきた周囲の中で、「新調の白服」の白さを際立たせます。この対比で、「白服」の涼しさとともに着る人の矜持を感じさせてくれます。

ざぶざぶと白壁洗ふわか葉かな

小林 一茶

「白壁」と「わか葉(の緑)」の対比です。一茶らしい、日常の何気ない景を親しみやすい表現で詠んでいます。屋敷林の中に建つ土蔵の白壁でしょうか。「ざぶざぶ」という擬音語によって、「わか葉(の緑)」の勢いを感じるとともに、色の対比によって「白壁」の白さも際立って感じられます。

蒼翠を穿ちて白き夏の湖

富安 風生

「蒼翠」は樹木などの青々とした様を言いますので、この句は、山の「緑」と「白き夏の湖」を対比しています。山上湖のような湖を思えばいいでしょう。光の加減で「白き」と見えたのか、印象としてそのように感じたのか分かりませんが「穿ちて」からは、周囲の緑の傾斜の中に湖があるイメージが湧き、「蒼翠」とそれに抱かれるような「白き夏の湖」の対比が鮮明になります。

海の紺白く剥ぎつつ土用波

瀧 春一

海の「紺」と土用波の「白」の対比です。南方の海上に台風が発生したときなどに太平洋沿岸に寄せる高波が「土用波」です。海の色は「紺」ですので、風は強くとも天気はいいのでしょうか。「白く剥ぎつつ」に自然の迫力と怖ろしさを感じます。

青蛙喉の白さを鳴きにけり

松根 東洋城

一匹の青蛙の「青（緑）」と喉の「白」の対比です。大きな対比ではなく、小さな生きものの中に発見した二色の対比なので、青蛙全体が見えます。鳴くという行為まで詠んだため、白い喉の震えも伝わり、臨場感が増します。「を」は上手い表現です。

山中に河原が白しほととぎす

相馬 遷子

この句は河原の「白」以外の色は出していない。ただし山地に鳴く「ほととぎす」ですので、「山中」という言葉からは濃い山の「緑」が浮かび、河原の「白」との鮮明な対比が生まれます。「ほととぎす」の声によって、山の深さを実感させるだけでなく、河原の白さも際立たせたとところが面白いと思います。

ひとり立つ鷺の白さよ五月雨

井上 土朗

この句も明確な色の対比はありませんが、「白鷺」と、その生息する水田や水辺の「五月雨（中の緑）」を対比させた句と思います。「五月雨」の中、やや暗い静かな緑の中から「鷺」が光を発しているように感じたのかもしれない。「ひとり立つ鷺」の擬人法によって、「鷺」に神々しさを覚えます。

菖蒲湯をうめる水白く落ちにけり

高浜 虚子

「白」による色の対比の上級編の句です。沸かした湯に落とす水は温度の差もあって見た目にも明らかに異質。その感覚を視覚的に「水白く」と言ったのでしょうか。湯に放られた「菖蒲」の「緑」

も生き生きと蘇ります。浴槽に張られた滑らかな湯に落ち入る白水の輝き、そして菖蒲の葉の新鮮な「緑」が見えます。

袈裟がけに青山肌に一雪溪

福田 寥汀

この句は「白」という色は出していません。しかし「雪溪」によって「白」は感じ取れます。「雪溪」は、夏の季語ですので、「青山肌」と詠んだように、周囲の山肌は青くなっているのです。「袈裟がけ」からは荒々しい山肌を斜めに走る雪溪が見えます。山の「青」と雪溪の「白」を対比させた、見事な夏山詠です。

「白」と他の色の対比で詠まれた作品の他に、同じ「白」と「白」を対比させた作品もあります。最後に二句紹介します。

船よりも白き航跡夏はじまる

鷹羽 狩行

この作品は、真っ白な船体とその船が引く「航跡」の対比です。「より」という「比較」の助詞を用いて同じ「白」と「白」の違いを感じられるように対比しています。「冬」や「春」を経てきた白い船体が、それよりも白い「航跡」を引いている事に気付き、夏が始まる事を実感したのです。「夏はじまる」の下五からは、「いよいよ始まる」という、「夏」への期待感が伝わります。

葉ざくらや白さ違へて塩・砂糖

片山 由美子

この作品は同じく「白」と「白」の比較ですが、その色の違いを更に大きな「葉ざくら」という背景の中で捉えているのが特徴です。一見同じ白の塩と砂糖も、触れば砂糖のしつとりに対し塩はさらさら。この微妙な違いは視覚でも感じられる。桜若葉である葉桜の清々しさがそれを可能にしたのでしょうか。

今回紹介した作品は、対比の妙やその鮮明さに目を奪われがちですが、いずれも対比によって季語が更に輝く、又は季語によって対比が一層輝くという点を見逃さないでほしいと思います。